

■研究ノート

縄文時代の洞穴遺跡 —小松洞穴と岩谷洞穴—

佐々木 務 (学芸調査員)

はじめに

岩手県内の縄文時代には沿岸部に多くの貝塚が形成され、当時の人たちの食料をはじめとする生活の一端を知ることができます。

内陸部には、花泉町周辺を除き、あまり貝塚はありませんが、県内の広い範囲に分布している石灰岩地帯には多くの石灰岩洞穴があります。この洞穴の一部は遺跡になっており、魚や動物の骨や貝殻などが出土して、内陸部の人たちの生活に関する情報を得る事ができます。

ここでは、縄文時代の人たちの生活が、住んでいる場所によってどう違っていたのか、内陸部と海岸部の人たちはどんな関係をもっていたのかを、県北部と県南部の洞穴遺跡から出土する骨や貝などを対比しながら考えてみたいと思います。

小松洞穴と岩谷洞穴

県内で洞穴遺跡の動物遺存体が詳しく調査された例は多くありません。その数少ない例である岩泉町の岩谷洞穴と住田町の小松洞穴の二つの洞穴遺跡から出土した骨や貝の内容・立地・沿岸部との関わりなどを比較し、それぞれの共通点、相違点などをみてみます。



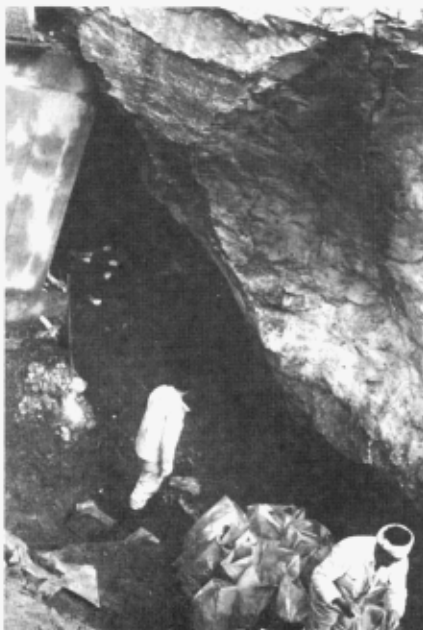
遺跡位置図

岩谷洞穴は縄文時代前期はじめから

晩期まで、小松洞穴は縄文時代早期末に骨や貝殻などからなる貝層が形成されています。なるべく近い時期の出土遺物を比べるため、岩谷洞穴は小松洞穴の貝層形成時期に近い縄文時代前期前半の出土遺物に限って内容を比較します。

この二つの洞穴遺跡の位置や出土遺物の概要からみていきます。二つの洞穴とも石灰岩地帯にあり、近接する場所に河川があります。

岩谷洞穴は県北部岩泉町を東西に流れる小本川の支流三田貝川に流れ込む関沢に面しており、早坂高原の近くに位置しています。標高は約590mで、小本川河口からは約40kmの距離があります。トンネル工事に伴い、1975年に県教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代前期初頭から晩期の土器や石器、骨角器、動物や魚の骨・貝等の動物遺存体が出土しています。



岩谷洞穴調査風景

小松洞穴は気仙川上流の住田町上有住にあり、気仙川河口からは約34kmほど、標高は201~204mです。ここは、岩手県立博物館の調査研究活動の一環として、1995~1998年まで発掘調査が行われました。発掘調査では、縄文時

代早期から近世まで、さまざまな遺物が出土していますが、この中で状態のよい縄文時代早期末の遺物を含む層(遺物包含層)が確認されています。ここからは、さまざまな動物遺存体も出土しています。

動物遺存体の内容比較

次に二つの洞穴遺跡から出土する動物遺存体の内容を見ていきます。

岩谷洞穴では海産貝類はごく少量しか出土していません。ユキノカサガイという岩場の貝です。貝類の多くは川でとれるカワシンジュガイという二枚貝で、全体では大量に出土しています。魚類は海でとれるものが比較的多く出土しています。絶対量は多くはないのですが、岩場に住む種類が多いフサカサゴ科の魚、岩場に来るカワハギを含むカワハギ科の魚とマグロ・カツオ・イワシ類などの回遊する魚が出土しています。ヤマメ・イワナなどを含むサケ科の魚の骨も出土しています。

両生類ではヒキガエルが非常に多く出土しています。ヒキガエルの上腕骨から雄か雌かがわかり、これをみると雄が圧倒的に多く出土しています。繁殖期に繁殖場所に集まるヒキガエルは雄の割合が非常に多く、雌の取り合い(カエル合戦)になるという事ですが、そのような場所でまとめてヒキガエルを捕獲していたのかもしれませんが、骨には石器などによると思われる傷もあり、食用にされたと考えられます。

その他、爬虫類ではヘビ類が少し出土しています。ほ乳類はシカ・イノシシ・ネズミ類が比較的多く出土しています。シカやイノシシは食用にされたり、骨や角・牙が加工されて道具として使用されたと思われる。ネズミ類については、自然死したのものもあると思われる。

小松洞穴の場合、貝類は多くが海産貝類で占められています。種類も比較

縄文時代の 動物遺存体

的が多くなっています。主体となるものはイガイとアサリでレイシガイなども出土しています。岩谷洞穴で多くみられたカワシンジュガイは全部で6点しか出土していません。

魚類は岩谷洞穴とそれほど大きな違いはありませんが、小松洞穴ではソウダガツオ属が出土していない事やフサカサゴ科が少ない事などが異なる点です。ヤマメやイワナと考えられるサケ科の魚やアユなども出土しています。

両生類は大きな違いがあります。小松洞穴ではヒキガエルが全く確認されていません。

爬虫類は岩谷洞穴と同じくヘビ類の椎骨が確認されています。

ほ乳類はイノシシとシカが主体でかなり多く出土しています（個体数で見るとイノシシ25、シカ37）。次いでネズミ類・タヌキ・オオヤマネコ・ノウサギなどになります。

鳥類では、ヤマドリなどが出土しています。

海岸部との関係

海の貝類や魚が内陸の洞穴遺跡で出土する事は、沿岸部との往來のあった証拠と考えられます。この往來はおそらく川に沿って行われていたと思われる。こうした見方でそれぞれの洞穴遺跡に近接する川の河口付近の様子をみてみます。

岩谷洞穴のある小本川の河口付近には縄文時代の貝塚はあまりありません。また、河口が外洋に直接面していて、河口周辺などを除き、岩場が広がっています。岩礁性の貝はいるものの砂泥底にすむ貝類に適した生息環境には無いようです。縄文時代も、貝塚を形成するほど大量の貝がとれるような環境ではなかったように思われます。岩谷洞穴で少量の岩場の貝（ユキノカサガイ）しか出土していないのは、こうした小本川河口付近の環境を反映しているの

ではないでしょうか。フサカサゴ科などの岩場に多い魚の出土も小本川河口付近の環境と矛盾しません。

一方、小松洞穴のある気仙川の河口付近には縄文時代前期には牧田貝塚や二日市貝塚、中沢浜貝塚などの貝塚が形成されています。その中で気仙川河口に近く、発掘調査の中で動物遺存体の分析が行われている牧田貝塚を見えます。主体となる貝類はアサリ・レイシガイで、イガイも確認されています。魚類はマグロ属が多い内容になっています。小松洞穴と内容的におおむね共通しています。岩谷洞穴ではフサカサゴ科などの岩場の魚もやや多くみられますが、小松洞穴ではごく少量しか出土していません。牧田貝塚でもフサカサゴ科の魚は出土していないようです。



小松洞穴現況

このように、小松洞穴・岩谷洞穴それぞれから出土している海産の貝類や魚類の違いは、立地している近接河川の河口付近の環境の影響を大きく受けたものと考えられます。それぞれの立地する河川の河口付近とのつながりが強く、その河口付近でとれる魚や貝類が川づたいに持ち込まれてきたものでしょう。

遺跡の周囲でとれるものについてみてみます。岩谷洞穴で多く出土しているカワシンジュガイは小松洞穴でも出土しており、付近に生息していたと思われる。ただ、縄文時代の気仙川流域の遺跡でカワシンジュガイを出土している遺跡はごく少なく、現在は生息していません。当時から生息数は多くなかった可能性があります。

一方、小本川流域には他にも出土している遺跡があり、現在もカワシンジュガイが生息しています。この地域はカワシンジュガイの生息により適しており、縄文時代にはたくさんのカワシンジュガイが生息していたのではないのでしょうか。

もう一つ対照的なのが、ヒキガエルの出土数です。岩谷洞穴ではヒキガエルがたくさん出土していますが、小松洞穴では出土していません。理由はよくわかりませんが、他の遺跡の状況をみながら考えてみたいと思っています。

まとめ

以上、岩泉町の岩谷洞穴と住田町の小松洞穴から出土した動物遺存体の内容を比較してみました。両遺跡とも海産の魚や貝類が比較的多く出土しています。内陸でありながら、ある程度海産の産物に依存した生活だったようです。海産の貝類も多く出土している小松洞穴の方がより大きく海の産物に依存していたものと思われます。

岩谷洞穴や小松洞穴の人たちが直接海に魚や貝を取りに行ったのかどうかわかりませんが、交易などによって入手していた場合、その対価となる産物がなければならないでしょう。交易の場合は何が対価として海の人たちにもたらされたのか、興味があります。

縄文時代の人たちは洞穴遺跡出土の動物遺存体からみると、地元でとれるものばかりでなく、数十km離れた海でとれるものも、日常の生活の中で一定の必要性をもっていたと思われます。基本的に自給自足の生活ではあっても、それぞれが周辺地域と密接な関係をもちながらくらしていたのでしょう。